
人間になったアバドン

ひらがな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間になったアバドン

【Nコード】

N9701R

【作者名】

ひらがな

【あらすじ】

改稿を終えました。変わっていないかも知れませんが、話が大幅に変わりました。5番目のお知らせはまた変えますので、気にしないでください。この話は、劣等感のあるペルソナであったアバドンが女体化して、そして人間になり、色々と変える話です。

1 再スタート（前書き）

はじめまして、ひらがなと申します。

この話はもしも主人公達のペルソナが主人公だったら・・・的な話です。

ちゃんと元の主人公もいますが、オリジナル主人公視点が多いかもしれませんので、あらかじめご注意ください。

1 再スタート

四月六日、ターミナル駅、夕暮れ。駅前には多くの人でにぎわっている。

ターミナル駅の夕暮れはあまり綺麗ではない。土地開発が進みすぎてしまった様

だ。黒い煙が空を汚してしまっている様に見え、有里湊は落胆の息を吐いた。

湊は公子をちらりと見やる。公子は気分屋で、そして天然だ。誰よりも真っ直ぐ

の純粋な心を持ち、美しい容貌をしている。時折見せる公子の心の傷は、とても

男心くすぐられるのだろうと思う。それ故に湊はかなりの苦勞を強いられてきた。

この先の学校でもやっていけるのだろうか。湊は薄くくぐもった空を見やり、

大きなため息をはいた。

公子と湊は双子だ。公子も湊も負けず劣らず真っ直ぐな心を持ち、美しく、そして

考慮深い。前の学校では有名だったのだろうと思われる二人だ。

駅での事故、乗車を経て彼らは改札口を出る。

そうしたとたんに周囲の電気が電源を落としたように切れ、壁が薄緑に染まった。

なんだ、と彼らは空を見やれば、異様に大きく、黄色に発光した月が目の前にあつた。公子はあつ、と声を一瞬あげ、360度の景色を一望してから

「気のせいだよ。行こう」

と声を湊に掛ける。湊は会釈で返事をした。

公子の声は震えていた。

彼らの間での会話は無い。そのような気分には至らなかったからだ。歩いていくと、赤い血だまりが広がっていたり、いつの間にできた建物の割れ目

から赤い何かが流れ出ていた。スクランブル交差点には多数のオブジェが並び、

それがまた不気味で、触ってみようというような好奇心よりも先に、ここから

出て行きたいという心一心で彼らの足取りは自然と速くなる。

時計を見れば、零時を回っていた。

巖戸台分寮も、とても不気味だった。窓にへばりつく草花に、階段に放置

されているだろう飲み食いの跡。ホテルを改装したようなモダンな雰囲気、

不気味さをまた強く押し出していた。

ギシギシと黒板を引っかいた様な堅く重い扉を開ける。大きな窓の棧からは

月の光が漏れ、薄暗く室内を照らしていた。窓にへばりついた草の

影が、

床のカーペットに映し出され、悪魔が笑っているように思えた。彼らは

ただでさえ大きい目を大きく見開いた。

「遅かったね。長い間気味を待っていたよ」

囚人服を可憐に着こなした少年が彼らの眼下に居る。髪は青く、そして色白で、

病的な雰囲気醸しだされていた。くりくりと大きい目で二人の姿を上から

下まで確認すると、少年はまた口を開く。

「この先に通りたいなら、まずここに署名して。でないと、入れないよ」

いたずらっぽく少年は笑う。

彼らは間もなくして署名をした。怪しい雰囲気だとは思ったが、子どもを疑う

気分には慣れなかったという事や、先ほどの奇怪現象による疲れ、そして何より

少年の余裕を絶やさない笑みが反論する気持ちを萎縮させた。

「うん、文字も合ってる。じゃあ、がんばろ？」

少年は、闇に溶けるように消えた。

「あなた達、誰!？」

休憩する間も無しに、彼らの疲れは倍増した。このような事態にももう驚かない。

薄暗い室内に細いシルエットが移った。少女の体は揺れ、髪の毛は

左右に跳ねている。

「まさか……もしかして」

ソプラノの様な音が使命感を背負っているように聞こえる。

「待て！」

よく通る声だと彼らは思った。少女の後ろから上品に体を動かす少女のシルエットが見える。大人の様に気品に溢れているのがシルエットだけでも分かった。

室内の明かりが点き、彼らの姿が露になった。一人の男に三人の少女。

彼らは両者とも動揺している様で、目をせわしなく動かしていた。

「君達は転入生だね？有里湊に、有里公子。合ってるか？」

気品ある少女に訊かれ、軽く会釈をして返事をする。

「私は桐条美鶴。この寮を管理している者だ。そしてこちらは……」

「岳羽です」

合わせたように茶髪の少女が湊らに会釈をした。両者とも会釈を返す。

何気ない会話が続き、岳羽という少女に二人が案内される形となる。岳羽は先ほどの怪奇現象や自分達の事は他の人に口添えないようにと釘を刺し、
ラウンジへと戻っていく。

疲れた彼らは、ベットに伏して間もなく眠りについた。

1 再スタート（後書き）

ご指摘があればよろしく願います。

2

（突然の出来事）（前書き）

今回からオリジナル主人公の登場となります。
文の構成や展開がおかしいです。

私が起こしたのは4月6日の電車内だった。窓から垣間見える景色は、整理され

た生気の無い住宅街と、排気ガスを垂れ流す工場しか見えなかった。

状況を把握する為に、私は首を動かしながら左右を見た。首の骨がぼきぼきと音

を鳴らし、それがとても痛かった。ちりぢりに座っている人達からは、残業後の

疲れと落胆、失望が見て取れた。目は隈があり、背は曲がっている。私は席を立たなかった。自分の体を動かせるだけ動かした。腕を振ってみたり、

足を動かしたり、最初は痛くて我慢ならなかったが、しだいに慣れてくると、

スムーズに運動が出来るくらいにまで上達した。

そんな奇怪な動きをする自分にも関わらず、回りの人々は虚ろ気な顔をしたまま動かなかった。

電車内の少し効きすぎた冷機が、私の足を冷やしてくれて、とても気持ち良かった。

電車が止まる。おり始めるサラリーマンを見て、私も釣られて下車した。

黒く染まった空を照らす蛍光灯も、虫が集っていたり、命絶え絶えな感じの物

もあり、それがまた疲れた感じがして、私は少し気分がしずむ。

それにしても、ここは何処なのだろうか。地に足を着けた私は、そ

んな事を

疑問に思った。いつもは、彼らの中でじっと縮こまっているのに。

+

「ほうら、アバドン。獲ってみるよ」

「ダメ、だめだから。それはだめだから！」

「アバドン。肩揉めよ肩。ほら、さっさとやれ！」

「はい……………」

「お前力だけはあるんだな！ツプ」

「おま……………」

私は彼らの中でずっとこき使われてきた。いい加減せいせいしていた。

持ち主である彼らの前では賢く動くのに、どうしてもこんなに陰湿なんだろうと

思い、気持ちが弾む事は無かった。そうだ、私はアバドンだ。

容姿の事でさんさん馬鹿にされ続けた。おまけに体力消費の多い技ばかりの私は、

あまり重宝されず、底辺生活を送っていた次第である。

彼らが大きいなる封印を終え、私達の役目もう終わったと思っていた頃、

彼らの記憶を戻す好機が現れた。それは私達の持ち主である者の封印の日でも

あった事は私達にも勘付いたこともあったかもしれない。

そうなることも、私達ペルソナは知っていたのだと思う。

（ヤバイ！大事な知らせだ！このままじゃ主人達が消滅する！）

一人が何を聞きつけたのかは知らないが、そう叫んだ。

（大丈夫だ。俺は良い案持つてるぞ。俺達が念じるんだ。最後の封印される力

はまだ主人らは持つてる。そしてだ、俺らペルソナは主人と裏表一体だ。

何を云えばいいのか分かるな？

一人が暗い声で言い放つと、

（分かった！主人達が生きる事を望めばいいんだ！それを僕達が望めば！）

一人が高い声で言う。

（（（（（それか！）））））

（ちょっと待ってよ、主人達は望んでないんじゃないの？そんなことしたら

苦労が水の泡だよ……）

オルフェウスが反対するが、意気込む彼らの前では太刀打ちできない。

私は、何も言わなかった。

+

そんな事があったような気がした。だから、私がこんな所に着たのか。

そう考えると合点がついて、スッキリしたような感じもする。

またとたんに罪悪感が湧いてきた。彼らの苦労が水の泡なのではないか。

オルフェウスの云った通りだと思う。私は申し訳なく思いながら地を歩いていく。生ぬるい風が気持ち悪く頬に残った。

3

（突然の出来事）（前書き）

改善していけるところは改善していこうと思います。

5月9日改稿しました。

3

（突然の出来事）

強い月の光に目を萎ませながら目を開けた。良くも悪くも、私は人間になり、生活していかねばならないようだった。

急に街の雰囲気が変わる。――影時間だ。私はすぐにそう思った。

忌まわしい時間の忌まわしい記憶が蘇る。そんな嫌な気持ちを振りだす様に私は首を振った。威厳に満ちた月、地形が変形してしまった駅。そしてオブジェになる人々。何時見ても、一瞬は困惑してしまうこの風景。

私は向かう先をタルタロスに決めた。理由は、なんとなく、でしか無い。

私は脱兎の如く走りだした。景色が移り変わりするが、無機質な建物達は変わらない様に思える。

必死をこいて学園前に来たものの、早々に息が上がった。建物を押し固め、そして建て増しを繰り返した様な塔、タルタロスの上には威張るように月が君臨していた。門を飛び越し、タルタロス内へと入る。傷一つ無いタイルを踏みならし、階段を超えると、大きい門がある。私はその門を静かに開け、タルタロスの地へと降り立った。二、三階であれば、そう苦勞はし

ないと、私は
少し甘く見て、意気揚々とシャドウに立ち向かう。

千切っては投げ、千切っては投げの繰り返しだった。アタッシェ
ースから取り出した
薙刀やら剣やらをシャドウに恨めしく投げつける。用途は違うが、
この方が何倍
も効率は良い。

数分した所で息が上がり、私はタルタロスから出た。影時間が終わ
るまで私は
そこにいつづけ、タルタロスが平然とした学校に戻る様はとても恐
ろしい。
タルタロスがぱっかりと割れ目を付け、そこから学校が組みなおし
される。タルタロス
の破片は学校の一部一部に修正され、なんの変哲も無い学校になっ
た。

私はそのまま転寝をうち、草木の陰に隠れて眠ってしまった。誰か
に見られたら
とても恥ずかしいが、今は気にしない事とする。それよりも、眠る
のって気持ち
が良い！

3

（突然の出来事）（後書き）

改稿させていただきました。
かなり短くなつてしまいました。

4 アルバイト（前書き）

改稿しました。

4 アルバイト

閑散とした住宅街を抜けると、そこに月光館学園蔵戸台分寮がある。どうやらまだ朝早くのようで、時折スーツ姿のサラリーマンは見かけるが、

学生の姿は見られなかった。手元にある時計を見やれば、指針は5時30分と指して

いた。どうやら来る時を間違えた様だ。私は寮を見上げながら、誰にも気づかれない様にほっとため息をはいた。

私が人間になってからおよそ1日目だ。さわやかな風がこんなに気持ち良いもの

とは思わなかった。睡眠はあまりとらず、何となくこの寮を目指し散策していた

ら、あつたと云う訳である。そろそろ腹が減ってしまった。何とかして金を

見つけないとならない様で、私の心は焦りで満たされてしまう。

近くに置いてあつた食いさしのたこ焼きを啄ばみながら、私は求人求め、

また閑散とした住宅街を戻っていった。

〓 〓 〓 〓 〓

「んで、この仕事に就きたいという訳かい？」

「はい。お願いします」

「んじゃ分かったよ。取り敢えず日雇いって事で良いよな」

「ありがとうございます」

私は澤田と名乗る男を尊敬の眼差しで見やった。どうやら私が食糧不足で倒れて居た所をこの男が拾ってくれたらしかった。水はもらうわ、たこ焼きも貰うわで

私は安心した気持ちになれた。そして澤田さんに対する感謝を色々述べ、自分が今とても困っていると言えれば、日雇いアルバイトとして雇ってくれる様にしてくれたという訳である。

澤田さんは大工らしく、その職場を仕切る権力者らしい。

風貌は地黒の肌に逞しい二の腕、そしてごつごつと骨ばった体。私が彼らの中で見てきた中で最も男らしい男といえる人だった。

私は木材運びをすることになり、近くの工場から肩に長い木材を掛け、現場まで往復したり、食料を買いに行ったり、と色々とききを遣わされていた。

空が赤く染まり、水色と赤のコントラストが美しく映えた頃、一時休憩となり、私は汗だくで近くの出っ張った岩に腰掛けた。ごつごつしてとても痛かったが、しごいてきた足がとても痛み、それを気にする所では無い事を悟った。

「お疲れさん。アルバイトの人」

澤田さんに声を掛けられる。両手には缶珈琲を持ち、そのうちの一つを私に差し出してきてくれた。どうやら働いた饞別の様だった。ありがとう
思い
受け取り、私はそれを水のように流し込む。苦い味がして吐きそうになった
が、気にしなかった。

「いい働きっぷりだ。明日も頼むな」

澤田さんは片頬を上げ、にやりと笑った。私は明日もしごかれるのだと絶望

と、明日も働けるのだと感謝の意を澤田さんに送る。

空が夕闇に暮れるまで、私は澤田さんや他の人にしごかれ続け、働き続けた。

汗が作業着にべったりとこびりつく。手元にあったタオルはとても汗臭かった。

〓 〓 〓 〓 〓

手取り1万円。なかなかの高収入だった。コンビニで引き上げ寸前の安い弁当

を買い、私はそれに貪りつく様に食べた。働いたという達成感があり、私の

心の中はアドレナリンに包まれる。汗が乾き、体温が下がる事によって、

眠気に襲われた。

おやすみなさい。

|| || || ||

彼女が必死で仕事を探している最中、私立月光館学園は始業式だった。

有里兄妹は両者とも同じ組となり、ゆかりや順平と戯れた。

ただ唯一、彼らの心にはしこりが残っていたが、彼ら自身もその事には
気づかなかった。

4 アルバイト（後書き）

澤田さんは物語と何の関係もありません。

改稿中の事についてです。(前書き)

改稿中です。申し訳ありません。

改稿中の事についてです。

4話のみですが、改稿させていただいております。大まかな流れは変わりありませんが、

オリジナル主人公の名前が付くところ等が無しになっています。

前話と次話の話の進み方が違うところがあります。そこも改稿していききたいと思います。

色々と話が変わってしまいましたので、矛盾点が増えるかもしれませんが。

改稿が終わり次第、次も書いていきます。

改稿中も小説を覗いて下さった方等もいるかと思えます。

とてもうれしかったです。ありがとうございます。

改稿中ですので、変えたと思ったらまた変わることもあります。

予めご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9701r/>

人間になったアバドン

2011年10月8日22時05分発行